

## らららの世界

西川和榮

夫婦間の呼び方は多様である。妻をずっと「そちら」と呼んでいた、というのである。最後までそう呼んでいたというのだ。下句は、そう呼ばれづけた思い出を、音楽に乗せて口ずさんでるおもむき。楽し気な音楽は、樂しかつた思い出の表現と読んでいい。

凸凹の街を見おろす白い月 動道守りて黄色くなりぬ

真田裕子

斎藤佐知子「選歌ルーム」が言うように、月の移行を色彩で表現してまことにユニーク。早いうちは白かつた月が、西へ回るうちに黄色味を増したというのである。

山々のふところ深く母体<sup>（よのたい）</sup>といふ土地あり雪を雲を抱けり  
佐々木寛子

「母体」という地名への興味を一首に仕上げた工夫が見どころ。地図を調べてみると「秋田県能代市母体」という所が見つかった。「雪を雲を」抱いている「母体」もまた山々に抱かれているという。入子になつているところが見どころ。

正午には空砲撃ちいしドンの山長崎によき時代ありにき

前川多美江

長崎には「どんの山」という山があつた。この山の測候所の職員が、毎日十二時に午砲を撃つて鳴らし、市民に時刻を知らせたという。調べてみると、明治三十六年から昭和十六年まで。同じ作者の今月の作に、「ドンの鳴つたあと十分で昼ごはん港の風がおつかいに来て」と

いう作もあつて、小学校時代（だらう）に「ドン」に親しあんだらしい。

三年の錆を浮かせて線路あり氣仙沼から北へと続く

谷岡亜紀

まだ復旧がかなわない鉄道、大船渡線（ドラゴンレール大船渡線）をうたつてゐるらしい。下句「氣仙沼から北へと続く」がびたつと決まって印象的な一首に仕上がつてゐる。

暮れ六つを撞く奈良太郎いんいんと空に漣あるが如しも

由田欣一

「暮れ六つ」はいまの時刻で午後六時ごろ、「奈良太郎」は東大寺の大鐘。古い語をうまく生かして古都の夕空にひびく鐘の音を余情深く表現してゐる。ただ、「空に漣あるが如しも」は、型どおりの感がしないでもない。

目を瞑る犬の鼻染を撫でてゐる骨に一番近づく場所を

大塚泰子

骨の近くを撫でることで、犬の原型、犬の本質により近づいた感じなのだろう。独特である。犬好きの作者なのだろう。犬好きの人ならではの感覚。

白色は夜の色かな星もなき闇に静まる木蓮の花

高山邦男

星も月もない夜に、白木蓮の花の白さが際だつてゐるのである。「白色は夜の色かな」という意想外の断定が魅力的。都会の空のかすかな明るさを読んでいいのかもしない。